【審査論文】

チェコ共和国の子どもによる図形の見立て
－図形の面に色彩を塗った場合－

島田由紀子

What images do Czech children have concerning geometrical shapes
－in reference to colored shapes－

Yukiko　SHIMADA

要　旨

子どもの描画表現には、普遍的な発達がみられるとされている。しかし、チェコ共和国と日本の子どもの自由画には描くモチーフには共通がみられるものの違いもあった。一方、色彩の性による使い分けが低いと推測されるチェコであっても、子どもが色彩と性を色で結びつけるとき、日本の子どもの結果との共通性がみられた。ここではチェコの子どもたちに、色のついた図形を提示したとき、何を見立て、描画表現するか、明らかにしようと考えた。また、見立ての描画表現には図形や色彩がどの程度、見立てることに影響するのか、明らかにする。

調査対象者は、3歳から9歳までの子ども67名である。調査方法は、Ａ３の調査用紙１枚に、基本的な図形と考えられる三角、丸、四角が、ピンク、黄、青に塗りつぶされた各２個、計18個を印刷したものを提示し、図形を何かに見立て、点や線などを描き加え、表現するよう指示した。調査時間は、子ども自身が終了を認めるまでとした。調査は2010年、2011年に実施した。

見立てに取り組もうとした個数の平均は7.87個、見立ての成立数は3.01個だった。成立数をみると、形と色の両方から見立てているのは全体の15.4％、形のみの見立ての成立は10.1％、色のみの成立は1.5％で、形が優先される傾向にあることがわかった。モチーフの特徴としては、図形の単体では「顔」、あるいは「頭」「標識」が、図形２つ以上の利用による見立てでは、「車」「トラム」などの乗り物がみられた。幼稚園児と小学生との取り組み平均個数には、大きな差がみられ、見立てへの興味、あるいは描画表現への関心が、小学生以降になると高まることが考えられる。モチーフからは、個性的な見立ての描画表現は少なく、特に見立てが成立した描画表現では、課題に忠実でわかりやすい表現が多くみられ、身のまわりのものを図式化された表現と解釈できる。

キーワード：　子ども、チェコ、見立て、描画、図形、
Children, Czech, image , drawing, geometrical shapes

和洋女子大学　人間・社会学系心理学・教育学研究室

１．研究の背景

これまで描画発達の研究では、Lowenfeld.V(1960)をはじめ、特に自由画について、あるいは自由画にみられる人物について取り上げられてきた。Kellogg.R(1969)は40カ国の子どもの描画を収集し、発達段階ごとに出現する形の分類を行っているが、環境や性差による影響については触れていない。最近の国内研究では、平田（2003）が描画に表される人物の出現には性差があることを指摘しているが、環境による検討は行われおらず、増田（1999）は日本とアイルランドの小学生の描画の比較研究を行ったが、日本と社会的文化的背景が似ている前提での比較であったことから、環境の影響には言及していない。イメージすることや表現することには、年齢、環境、性が影響すると考えられるが、この３つの要因を含めた調査研究が少ない。図形による見立ての描画研究では、（上野、2000）によって小中学生を対象に図形１種類の見立ての描画調査を実施している。しかし、見立ての成立数が大きく変化する４歳から５歳（島田、2008）は対象としていない。

この調査研究は、子どもが提示された図形から、何かを見立てて線描を描き加えて表すことで、図形から何を想像するのか、そして想像したものを描画で表すことができるのか、明らかにしようとするものである。これまでの描画調査の多くは自由画や課題画を1回につき1作品収集し、検討する方法が主であるが、ここでは１回の調査につき、基本的に18作品の描画の収集が可能であることから、ひとりの子どもの描画表現の傾向を掴むことができる。また、自由画や課題画の場合、何も描かれていない画用紙を渡し、「好きなように自由に描きなさい」、「○○を描きましょう」という指示が行われるので、テーマやモチーフを決めるまで、あるいは描く方法を決めるまでに時間を費やす子どもも少なくない。さらに、描きたいものが具体的にあっても、描写する技術が伴わないと描き示すことができない、ということが考えられる。この調査で用いる調査用紙には、子どもにとって積み木や玩具などで親しみをもっていることが考えられる、基本的な図形三角丸四角（以下、図形△○□）がすでに印刷されており、たとえば図形○に1本棒を描き加えるだけで「りんご」や「お団子」などを表現することができることから、描画表現の技術が乏しくても表すことが可能となり、図形から想像したもの、描きたいと思ったことを表現しやすくしている。

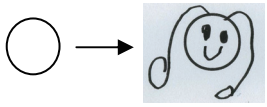

図１　図形による見立ての例

調査対象の国としてチェコ共和国（以下、チェコ）を設定しているのは、日本とは異なる環境であることが挙げられる。教育的な背景として、教育要領や指導要領のように均一な教育がされておらず、公立であっても小学校の校長先生や幼稚園の園長先生による裁量が大きいこと、EUに加盟するまで教員資格のない者も教育に直接かかわってきたこと、文化的な違いとしては色彩の使われ方が異なり、はっきりとした男の子色女の子色といった性による色の使い分けはされていないこと、が挙げられる（島田、2010）。しかし、色彩感情調査では日本ほど明確ではないにしても、子ども自身男の子色には青系、女の子色にはピンクを結びつけている（島田、2002）ことから、色彩感情の普遍性はもちろん、色彩と性との結びつきには環境以外の要因があることもうかがい知ることができる。一方、描画表現に焦点をあてると、日本の子どもには他国の子どもにはみられない日本の近代マンガの表現方法の影響があることが指摘されており（徳、2009）、また身の回りの記号的表現として棒人間を描く子どもが増えてきていることも報告されている（初田、2006）。では、チェコの子どもたちの自由画には、どのようなモチーフがみられ特徴があるのか調査を行ったところ、「自然」を対象に描いた描画が70％以上で、次いで「植物」「生き物」であり、日常生活にみられる風景を描くことを好む傾向がみられた（島田、2002）。

これまで、日本では幼稚園と保育所で、提示する図形の線が黒だけの調査と、図形の線をピンクと青に

加工した場合とで調査を行っている。その結果、4歳児クラスから5歳児クラスの間に、図形の見立ての取り組み、および見立ての成立の増加がみられること、図形の線の色彩が見立ての描画のモチーフにはすべての子どもに影響しているわけではないこと、しかし黒の線よりも色彩のある線の方が男児も女児も多く取り組み、成立数も上回り、男児は青の線、女児はピンクの線に、取り組み数と成立数が多くなることが明らかになった。また、園によって、取り組み数や成立数が異なることから保育環境による影響も考えられた。これらの調査結果から、図形による見立ての描画表現には、年齢、性、環境が影響することが推測される。

2．目的

そこで、自然物をモチーフに描くことを好むチェコの子どもたちにとって、自由画とも課題画とも異なる、図形による見立ての描画表現では、どのような見立てや描画がみられるのか、把握しようと考えた。日本の子どもたちの調査では、図形の線の色に性差が多少みられた一方、線の色が見立てそのものには必ずしも影響していないことも明らかだったので、ここでは図形の面を色彩で塗りつぶすことにした。図形の線のみの色彩よりも、色彩の強い印象を与えることになると考えたからである。また、見立ての理解の難しさと描画表現の技術の獲得も考え、一部小学生も調査対象者として加えることにした。

提示する図形の面に色を塗った場合の、見立てへの取り組み数と成立数が年齢、性別によって変化がみられるのか、それは図形の形ごと、色彩ごとによって異なるのか、またモチーフの特徴はどのようなもので、自由画のときのように自然、植物、生き物が表現されているのか、検討する。

3．方法

（1）調査用紙

A3サイズの用紙に、基本的な図形と考えられる△○□を各６個ずつ、そして各図形２個ずつの面を青、黄、ピンクに塗ったもの、18個の図形を印刷した。色彩は、チェコと日本の子どもの色彩感情の調査結果（島田、2002）から、両国に共通して男児が好む色の上位に青、女児はピンクで、いわゆる男の子色女の子色といわれる色であり、黄は性による色の使い分けがされにくい色であることから選んだ。

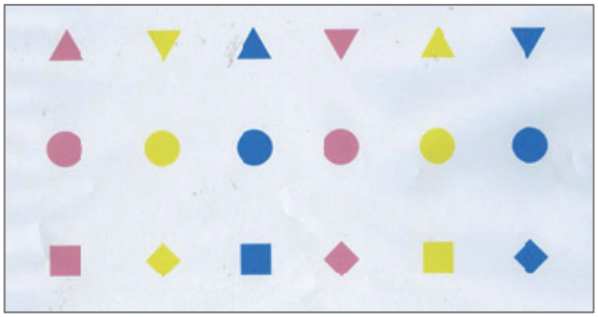

図２　調査用紙

（2）手続き

子どもに図形が印刷されている調査用紙一枚を提示し、その図形を何かに見立て、点や線を描き加えて表すよう指示した。幼稚園児は調査員との１対１の対面で行い、小学生は通常の授業と同じ形式で着席して教師による指示のもと実施した。見立てて描く際に、調査用紙を回転させて好きな方向から描いて構わないこと、好きな図形から取り組んで良いことを伝えた。

（3）調査対象者

幼稚園児56名（3歳男児2名・女児1名、4歳男児7名・女児12名、5歳男児6名・女児17名、6歳男児5名・女児6名）、小学生11名（9歳男児3名・女児2名、10歳男児3名・女児3名）である。ただし、年齢ごとの調査対象者数には偏りがあった。また、幼稚園のクラスが決められた年齢ごとではなかった園もあったこと、日本の幼稚園では１クラスに２つの年齢が属していること、小学生は学年による1学級だったことか

ら、３歳と４歳、5歳と６歳、9歳と10歳、という３つの年齢集団としての比較検討とする。

（4）調査時間

調査時間は、子ども自身が完成、あるいは終了を認めるまでとした。

（5）調査年月

2010年２月、2011年３月に実施した。

４．結果

（1）見立ての取り組み数、成立数

見立ての取り組みから､見立てや描画への意欲や積極性を把握することができると考えられる。そこで、見立てとして成立していない描画表現であったとしても、提示した図形に点や線を描き加えられた図形をすべて数え、図に示した。

①すべての図形に対する見立ての取り組み数と成立数

提示した18個の図形に対して、年齢別、性別に分け、見立てへの取り組み数と見立てとして成立数について、ひとりあたりの平均個数を図３にまとめた。

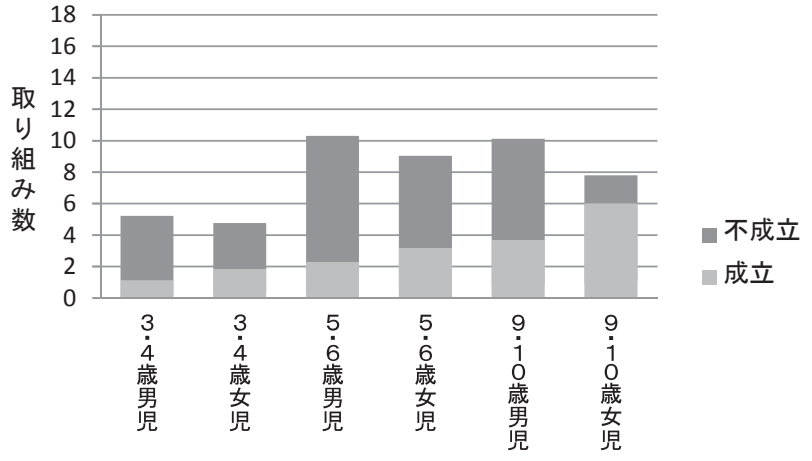

図3　すべての図形に対する見立ての取り組み数と成立数

見立ての取り組み数のひとりあたりの平均個数は7.87個で、もっとも多かったのは５・６歳男児の10.3個、少なかったのは３・４歳女児の4.76個。成立数でみると、平均は3.01個、最多は９・10歳女児の6.0個、最少は３・４歳男児の1.1個であった。取り組み数が年齢とともに増加するとはいえないが、成立数は年齢が増すごとに多くなっている。特に９・10歳女児では取り組んだ76.9％が見立てとして成立している。男児の年齢ごとによる成立数の差をみると、３・４歳と５・６歳では1.18個、５・６歳と９・10歳では1.39個、と緩やかな伸びがみられる。女児では、３・４歳と５・６歳では1.32個、５・６歳と９・10歳では2.83個と大きな増加がみられた。幼稚園児と小学生との取り組み平均個数には、大きな差がみられ、見立てへの興味や描画表現への関心が小学生以降になると高まることが考えられる。

②図形の形別の見立て

図形ごとに比較すると､図形○がやや取り組み数､成立数ともに高く､次に図形△､図形□の順であった。

図形△（図４）に対するひとりあたりの取り組み数の最多は５・６歳男児と９・10歳女児の５個、最少は５・６歳女児の1.31個、成立数の最多は９・10歳女児の2.6個、最少は３・４歳男児の0.11個だった。取り組み数は年齢に応じて増加はみられなかったが､成立数は年齢とともに伸びがみられる。３・４歳では、

ほとんど見立てが成立していないことから、この年齢で図形△を見立てることの難しさがうかがえる。このことは、子どもにとって△の模写が他の図形よりも困難であること（黒田、田中、1990）からも、他の２つの図形と比べ親しみのある図形ではないことがうかがわれる。５・６歳になると、男児では1.27個、女児は1.09個と増え、男児は９・10歳では1.33個と大きな変動はみられないが、女児の９・10歳では2.6個の成立数となり、取り組んだ52％が見立てとして成立していることから、この年齢の図形△には性差が認められた。

図形○（図５）の特徴的なことは、見立ての成立数への年齢による影響が少ないことである。取り組み数は９・10歳男児が5.5個と最多で、３・４歳男児が1.67個で最少だった。取り組み数は年齢に応じて多くなっているが、成立数では年齢に沿った変化はみられず、男児では見立ての成立が、３・４歳（0.78個）から５・６歳（0.82個）、９・10歳（0.83個）ではほぼ横ばい、女児の３・４歳は1.15個から、５・６歳では0.91個、と減少している。図形○に対する男児の見立ての成立数が今回の調査対象者の年齢間では差がみられなかったが、９・10歳女児では増えていること、他の図形よりもこの時点では成立数が少ないことから、それ以降の年齢になると男児も成立数は増えることが予想される。全体としては、他の図形に比べ、図形○に対する見立ての描画表現は成立しやすいこと、女児の方が男児よりもやや早い時期から見立ての成立が可能な図形であることがわかった。

図形□（図６）では、年齢とともに見立ての取り組み数、および成立数が増加している。取り組みの最多は、９・10歳女児の5.4個、最少は３・４歳女児の1.38個、成立数をみると最多は９・10歳男児の1.67個、最少は３・４歳男児の0.22個であった。３・４歳と５・６歳では、見立ての取り組み数は男児の方が多く（2.0個、3.91個）女児の方が少ない（1.38個、3.52個）が、成立数では女児の方が多く（0.38個、1.17個）、男児の方が少ない（0.22個、0.73個）。９・10歳では、取り組み数はほぼ同じで（男児5.33個、女児5.4個）、成立数はやや男児（1.67個）の方が女児（1.4個）を上回る結果となった。この調査結果から、図形□は低年齢児には難しい見立ての図形であることがわかる。

３・４歳にとって、図形○がもっとも見立てが成立する図形であるが、５・６歳になると、図形△○□の取組み数には差がみられるものの、成立数にははっきりとした差がみられなかった。

③図形の色別の見立て

図形ピンクの結果から（図７）取り組み数でひとりあたりがもっとも多かったのは、9・10歳女児の5.83個、少なかったのは3・4歳女児の1.54個で、成立数では9・10歳女児の2.2個が最多で、3・4歳男児の0.33個が最少だった。ピンクはチェコの女児にとっても好きな色であり、親しみのある色だと考えられることから、女児は図形黄や図形青よりも積極的に取り組むと考えていた。しかし、結果は男児と比較すると、取り組み数、成立数ともに少ない、あるいはほぼ同数であった。３・４歳、９・10歳では取り組み数は男児よりも少なく、５・６歳ではほぼ同じであった。成立数も、３・４歳では男児よりも女児の方が多いが、５・６歳、９・10歳ではほぼ同数であった。好きな色であることが、見立ての取り組み数や成立数に結びついたり、また、イメージしたり、描画表現をしようとすることにはつながらないようである。

次に図形黄（図８）では最多の取り組み数だったのは、9・10歳女児の5.4個、最少は3・4歳男児の1.67個で、成立数では最多も９・10歳女児の2.4個、最少も３・４歳男児の0.44個だった。年齢に応じて成立数が増加し、どの年齢でも女児の方が男児より多かった。取り組み数は、年齢に応じて男児も女児も増加がみられたが、成立数の伸びは女児の方が大きい。

図形青の結果（図９）では、取り組み数の最多が９・10歳女児の5.2個、最少は３・４歳女児の1.54個で、成立数では最多が９・10歳女児の1.4個、最少が3・4歳男児の0.33個であった。性別にみると、両者

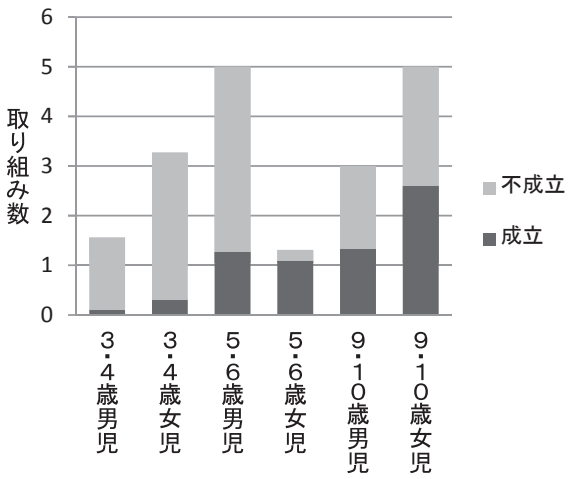

図4　図形△の見立ての取り組み数と成立数

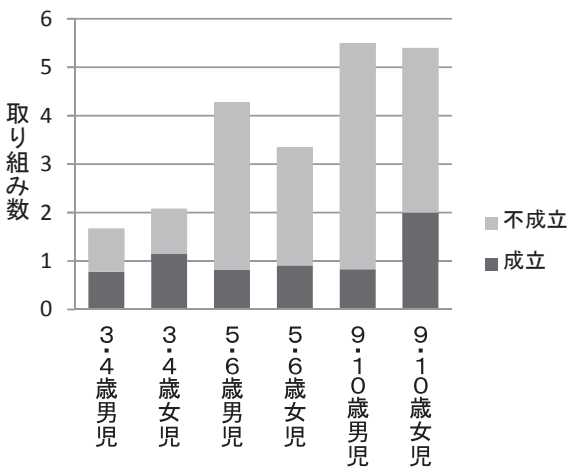

図5　図形〇の見立ての取り組み数と成立数

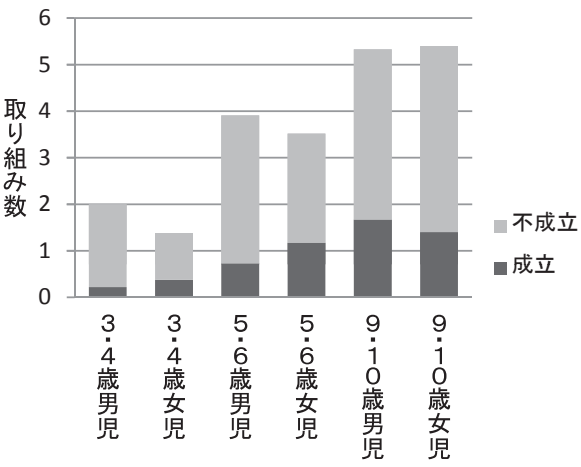

図6　図形□の見立ての取り組み数と成立数

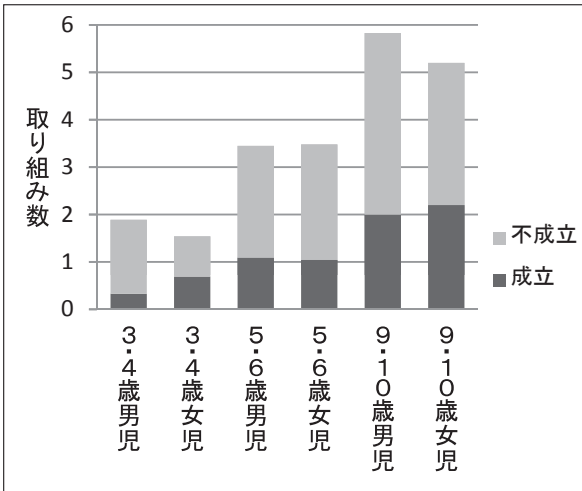

図7　図形ピンクの見立ての取り組み数と成立数

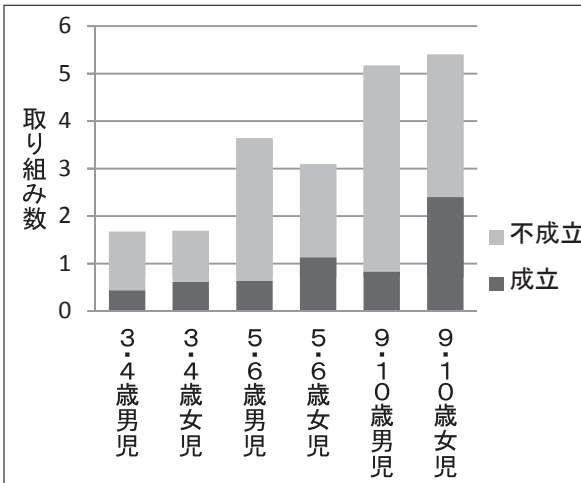

図8　図形黄の見立ての取り組み数と成立数

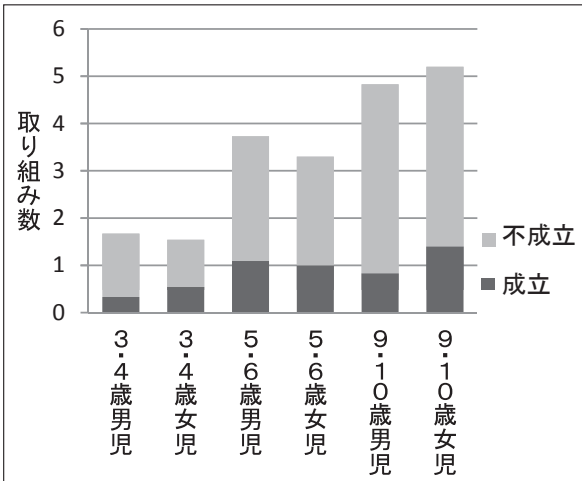

図9　図形青の見立ての取り組み数と成立数

とも見立ての取り組み数は年齢とともに伸びているが、この調査の３色の中では年齢に応じた成立数の伸びがもっとも少なく、９・10歳の男児では減少している。青は男児の好む色であることから、ここでも女児のピンクと同様に男児の取り組み数や成立数が女児よりも多いことを予想していたが、３・４歳、９・10歳では女児の方が男児よりも取組み数も成立数も多かったことから、子ども自身の色彩好悪と提示される図形の色彩とでは反応が異なることが明らかになった。

取り組み数、成立数ともに、図形ピンクがもっとも高く、成立数の低いのは図形青だった。

（2）モチーフの特徴

子どもが描き終わるごとに「何を描いたのか」尋ねたので、描いたモチーフを確認することができる。子どもがモチーフ名を答えたのは全体の44.4％であった。そのうちひとつの図形だけ単数で見立ての描画表現をしたものは94.6％、複数の図形を使ったものは、5.4％と少なかった。指示をする際、複数の図形の使用については触れていないので、子ども自身の考えによって複数の図形が用いられた見立てになっている。また、図10で図形○２つを使って「乗物の車輪」に見立てる描画を３作品示しているように、繰り返す傾向がみられた。このように、複数の図形を用いた見立ては、図形を車輪に見立てた「車」「電車」「自転車」（図10、11）などの乗り物で、少数では「家」などの建物が表されていた。図形の単独使用では、ひとや動物の「顔」や「頭」が多く（図10、11、12、13、14、15）、「標識」（図11,15）「太陽」（図11,15,16,17）,「凧」も男児女児両方にみられた(図10、16)。

図12の「宇宙人」のような反復する横並び方の並列する描画表現は、５・６歳女児の描画表現の特徴とされているが（皆本、1991）、ここでは男児の横並べ型もみられた（図17の「太陽」）。モチーフに「子馬」「お父さん馬」「羊」といった違いはあるものの、女児の縦の重ね型の反復もみられた（図13）。また、自由画の描画収集ではほとんどみることのなかったキャラクター的な表現も、今回の調査ではみられた（図13、14の「スマイル君」）。図18の３歳男児が描いた「道路」は、日本の男児の自由画や別の見立ての調査で、ときどき見られる「迷路」によく似ている。このような図形を意識しながらも見立てはせずに線による表現は、日本の女児でもみられなかったが、ここでも男児のみの表現であった。複数の図形による見立てでは、乗り物が多かったが、男児の自由画には乗り物が描かれることはこれまでも複数の研究者が報告しているが（新井、2001）、ここでは、男児も女児も乗り物を描いている。同様に自由画に人物がみられるのは女児が多いことが指摘されているが、男児の描画表現でも人物画や擬人化したモチーフが少なくなかった。モチーフからは、個性的な見立ての描画表現は少なく、特に見立てが成立した描画表現では、課題に忠実でわかりやすい表現が多くみられ、身のまわりのものを図式化された表現が多く認められた。

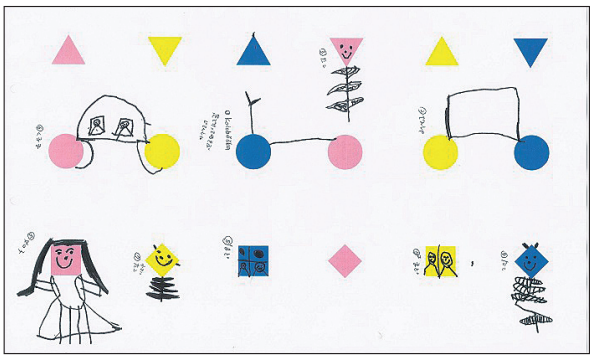

図 10　5歳女児
（△：凧，〇：車，自転車，電車，□：女の子，凧，窓，）

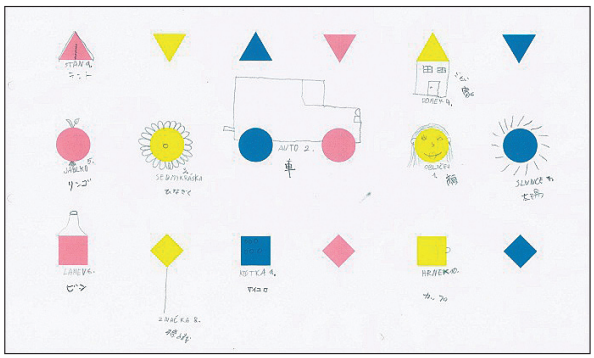

図 11　10 歳女児
（△：テント，家，〇：りんご，ひなぎく，車，顔，太陽，
□：ビン，標識，サイコロ，カップ）

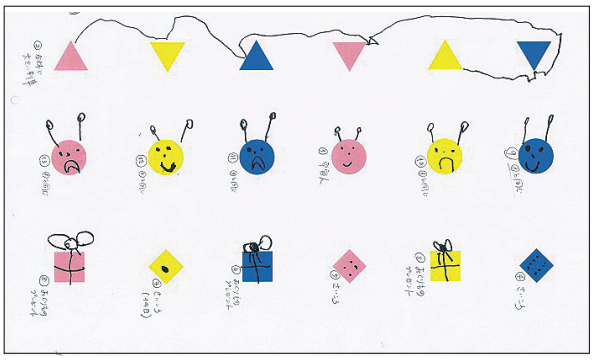

図 12　4歳女児
（△：電車，〇すべて：宇宙人，
□：プレゼント，サイコロが交互）

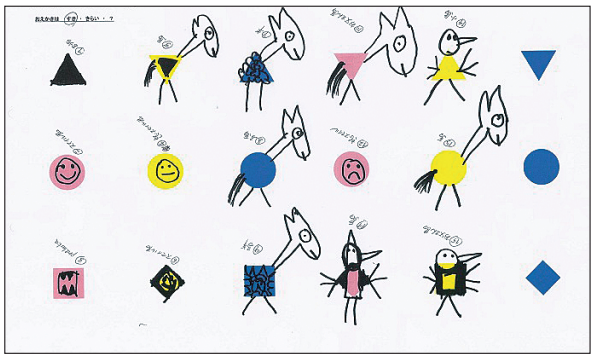

図 13　5歳女児
（△：家，馬，羊，お父さん馬，小鳥，
〇：スマイル君，スマイル君，仔馬，スマイル君，仔馬
□：窓，スマイル君，仔羊，鳥，鳥）

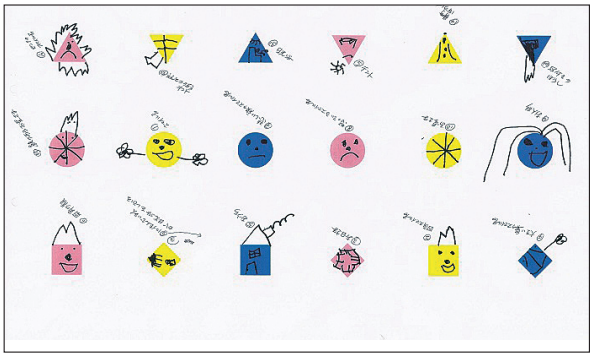

図 14　5歳女児
（△：スマイル君，テント，日光浴，テント，帽子，帽子
〇：顔のある星，スマイル君，スマイル君，スマイル君，星，人形
□:顔，日光浴をしている人，家，太陽，スマイル君，スマイル君）

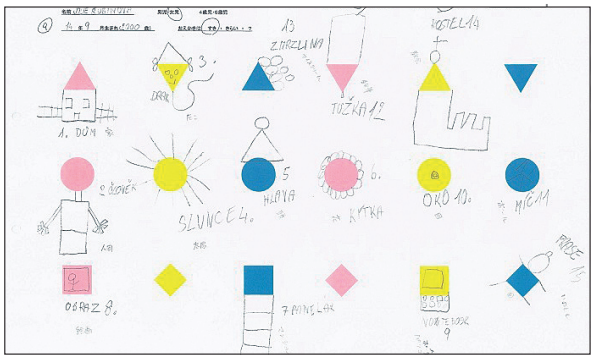

図 15　10 歳女児
（△：家，チーズ，黄，標識，ピラミッド，矢印
〇：ボール，太陽，惑星，顔，車
□：絵，標識，砂糖，パソコン，Tシャツ，旗）

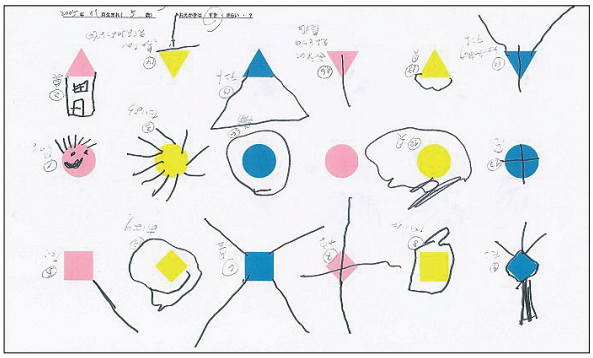

図 16　5歳男児
（△：家，鳥のえさ置き，テント，煙突の屋根，貝，テント
○：男の子，太陽，輪，貝，窓
□：凧，おばけ，星，十字，バディンシェ，凧）

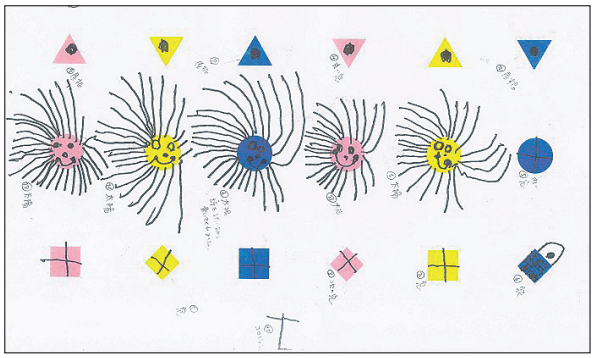

図 17　4歳男児
（△：屋根，屋根，屋根，丸い窓，屋根，屋根
○：太陽，太陽，太陽，太陽，太陽，丸い窓
□：窓，窓，窓，窓，窓，家）

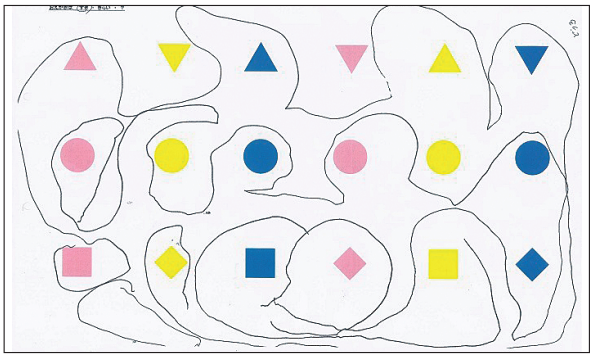

図 18　3歳男児（道路）

5．考察

これまでの調査でも、見立てを理解できない子どもにとっては、図形の輪郭線をなぞってその形を言う、図形を塗りつぶす、図形の近くに模写をする、図形とはまったく関係なく自由に描く、というパターンがみられたが、ここでも少数であったものの、それらの描画表現があった。見立ての成立数から検討しても、見立てを理解し描画表現することは３歳や４歳では難しい。横出ら（1988）の見立ての発生の契機の調査結果でも年少児の見立ての出現数の少なさは報告されており、これらの調査の開始年齢は適当であったと考えることができる。年齢が増すごとに、取り組み数、成立数も増加すると考えられるが、9・10歳が５・６歳よりも低い場合もあった。その要因のひとつは、調査対象者数の年齢、性別に偏りがあったことが影響していると推測される。

性別でみると、どの年齢においても男児は女児よりも取り組み数が多いことから、見立てを理解しているとはいい難い男児であっても、積極的に絵を描いて表そうという意欲が高いことが考えられる。女児の方が取り組み数は少ないが成立数では男児を上回ることから、見立てを理解し、図形から何かをイメージでき、なおかつ描き表すことのできる数だけ効率よく取り組んでいたと考えられる。女児の９・10歳が取り組み数こそ半分にも満たないが、成立数では70％以上であったことからも、そのように考えることができる。

男児は青系を好み、女児はピンクを好むことから、本調査でも男児は青の図形に、女児はピンクの図形に、積極的に取り組むのではないかと予想していたが、色彩嗜好と、色彩を持つ図形を見立てることや描

き加えることには隔たりがあるようだ。

モチーフの性ごとの特徴としては、自由画の特徴とは異なる結果もみられた。この調査で描くモチーフは自由ではあるが、図形から見立てることが前提になっている。したがって、子ども自身の知識との結びつきが大きく影響していることから好きなものを描くだけではないことが推測される。その結果、女児の乗り物や男児の人物表現がみられることになったと考えられる。また、反復や並列、パターン的な表現は女児特有のものとされているが、ここでは男児にもパターン的な描画表現が少なからずみられた。

見立ての成立した描画表現をみると、形も色彩も見立てに用いたものが15.4％、形のみの見立ての成立は10.1％、色のみの成立は1.5％で、形の優位が明らかになったわけだが、子どもの色反応と形反応を調べたデボラによると（1986）形が優先されるのは3歳から６、７歳の時期に色反応の優位から形反応へ移行し、４歳半から6歳までは色が、6歳以降は形が優先されると指摘している。今回の調査での形の優位という結果とは異なるが、ピンク、黄、青の３色のみの提示であったことから、その３色がどの程度子ども自身が知っているものと結びつくのか調査した上で、見立てでは形か色彩のどちらが優先されるのか結論づけたい。

今回の調査対象者では男児が少なく、また年齢構成からも偏りがあったことから、再度調査を行う必要がある。子どもが形からイメージするもの、色彩からイメージするもの、それぞれについても想起する調査を行うことで、図形の持つ影響についても確認したい。見立てについては、日本の子どもの調査結果との比較から、環境による影響についても把握することで、発達だけではなく環境や性差について着目することで、保育や教育現場において、ひとり一人に応じた表現活動のあり方や指導方法を示すことにつながると考えている。

本研究は、科学研究費補助金「幼児の図形による見立ての描画表現―年齢、環境、性差からの検討―（基盤研究（C）23531020）」の助成を受けた。

文献

Lowenfeld.V　美術による人間形成　黎明書房　1995
Kellogg.R　児童画の発達過程　黎明書房　1998
平田　智久　現代乳幼児の描画表現の探究 : その１発達過程　日本保育学会大会発表論文集 2003　56, p. 410-411
増田　金吾　子どもの発達と絵画表現：日英（北アイルランド）児童画比較研究　美術教育学 1999　20　p. 359-370
上野　行一　発達段階比較による造形的な「みたて」能力：探索過程における意味づけの多様性と拡張に関して 2000　美術教育学 21 51-61,
島田由紀子　チェコにおける男の子色，女の子色 小児歯科臨床 2010　15（12）p.24-28.
島田由紀子　幼児の色彩感情（２）チェコと日本の幼児の比較を中心に 美術教育学 2002 23 p.97-107
黒田佳代子　田中　敏夫　幼児の図形模写に関する発達的研究（１）－縦断的方法を中心として―　日本教育心理学会総会発表論文集　1990　32　p.203
徳　　雅美　Tradition & Innovation in Children's Artistic Development　：　Manga's Contribution to Visual Literacy in the Contemporary Youth World.
http://www.csuchico.edu/~mtoku/TokuManga&ArtEd&CAD.pdf#search='『マンガは越境する』グローバル化への挑戦 '2009 7 19
初田　　隆　棒人間の研究　美術教育学　第27号　2006　p.337-349
島田由紀子　チェコの幼児の自由画―題材による特徴―　日本保育学会大会発表論文集　2002　55　p.444-445
皆本二三江　０歳からの表現・造形　文化書房博文社　1991　p. 5 - 6
新井　康允　幼児の自由画の男女差とアンドロゲン　人間総合科学　2001　1　p.105-115
デボラ・T・シャープ　色彩の力　福村出版　1986　p.21－54
横出　正紀　寺戸　史子　造形的遊びにおける「みたて」の発達　日本保育学会論文集　1988　41 p. 422-423
島田由紀子　幼児の見立て（2）－図形の持つ色の影響－　和洋女子大学紀要　第51集　2011　p.189-199

It is widely believed that there is a universal process concerning development of children's drawings When we compared the works of Czech children and Japanese children, we found a clear difference in motifs between the two groups which according to our observations was influenced by the respective environments. However it can also be concluded that there is a distinct similarity between the Czech children's drawings and the Japanese children's drawings in the sense that the color image is tied to the gender, which was not expected with Czech children.

During the course of this study, I attempted to determine what images the Czech children draw and with what geometrical shapes and colors to create these drawings. I also attempted to determine if the drawings made with geometrical shapes and particular colors took influence from the particulare and if the color and the shapes influenced their imagination in any way.67 children between the ages of 3 to 10 were used as subjects of this research. The children were given A3 sheets of paper. On the paper was printed a triangle ,circle and a square(which represented the geometric shapes) and each shape was painted in blue, yellow and pink along with the same pattern for each shape and color, 18 geometrical shapes altogether. The children were asked to draw pictures regarding their image of the geometrical shape adding lines and dots. When the children felt that the image was complete, they were allowed to finish it. The research was done between the years 2010 and 2011. 15.4 % of the total pictures were drawn by the images of both shape and color. 10.1% of the total pictures were drawn by image of the shape. 1.5% of the total pictures were drawn by image of the color. Therefore it can be concluded that there is a tendency to have the shape as a priority. The images drawn by the Czech children in the instance of drawing a single shape are the faces, heads and indicators. The images of two or more shapes were represented as vehicles such as cars and streetcars. There is a discrepancy among the kindergarten children and primary school students regarding the numbers of the objects the children tried to draw. This could be because primary school students are more interested in drawing pictures made with geometrical shapes or are more generally interested in drawing itself. There were not any particular motifs to these drawings and many of the objects drawn by the students were clear and easy to understand as most of them represented everyday objects.

島田由紀子（和洋女子大学人間・社会学系准教授）

（2011年９月24日受付）